

詩編 119 : 89～96

ルカによる福音書 21 : 29～38

「いつも目を覚まして祈れ」

<神殿で教えられたこと>

今日読まれた 21 章の最後、37～38 節には、イエスさまが毎日エルサレムの神殿の境内で教えておられたこと。そして、それを民衆が聞こうと集まっていた、ということが語られていました。

これは、19 章の最後の部分、47～48 節に「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」とあったところの、締めくくりの部分にあたります。

「イエスさまが神殿で教えを語り、民衆が聞いていた」という文章に挟まれて、19 章の終わりから 21 章の終わりまでが、一つの枠となっているのです。

今日はその、神殿でのイエスさまの教えの最後の部分になります。

<滅びるもの>

神殿での教えで、特に 21 章からは、この世の終末、終わりの日について語られていました。イエスさまは、エルサレム神殿の崩壊を予告され、また戦争や暴動、疫病や災害などはまず起こるものである、と語り、「この世の終わりはすぐには来ない」と言われました。

当時の人々にとっての神殿の崩壊、また当時も今のわたしたちにとっても、戦争、疫病、災害など、破壊や死をもたらすようなこの世の出来事は、もう世界が滅びてしまうのではないかと、不安になる出来事です。もう駄目だ。すべて破滅する。何もかも失われ、終わってしまう、と思わされる出来事です。それは、世界の滅び、そして自分自身の滅び、死を、思わされることです。その時わたしたちは、怯え、不安になり、惑わされてしまいます。

しかし、イエスさまは、それらのことが、この世の終わりを招くのではない、と言われました。この世の終わりは、終末は、神さまによってもたらされるのです。救いの御業を果たされたイエスさまが、再びこの世に来られることによって、すべては終わるのです。

それは今日の 32 節で「はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。」そう言われていることと、同じであると考えられます。すべてのことが起こるまでは、つまり、イエスさまが再び来られる日までは、この時代、この世界に本当の滅びは来ない、本当の終わりは来ない、ということです。

ある人はここの解釈で、この世は、そしてわたしたちは、「自分で自分を滅ぼせないのだ」と表現していました。自分で自分を滅ぼすことは、「許されてもいない」ことだ。

この世を、自分も含めて、終わらせる権威など、誰も持っていないのです。「それは傲慢だ」とさえ言うのです。滅びを決定し、滅びを与えるのは、神さまなのだ。世界のすべてを終結させるのは、世界をお造りになった神さまにしか、出来ないことなのです。

<滅びないもの>

そして、イエスさまはこう言われました。33 節「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」天地は滅びる。天と地。この世のもの。神さまに造られたもの。それはわたしたちも含めて、すべては、永遠ではありません。ですから、いつかは必ず終わるのです。イエスさまが来られて、本当のすべての終わりが来るのです。

しかし、イエスさまは言われました。「わたしの言葉は決して滅びない。」

わたしの言葉。イエスさまの言葉。これは、決して滅びない。終わらない。揺るがない。生き続ける。そう言われたのです。

ところで、この、「言葉は決して滅びない」という言い方は、旧約聖書の時代から「神さまの御言葉」について言われてきたことです。

例えば、先程読まれた旧約聖書の詩編 119 編 89 節にはこうありました。「主よ、とこしえに／御言葉は天に確立しています。」神さまの御言葉は、とこしえに、天に確立している。永遠に、しっかりと立てられている。

また、96 節には「何事にも終りと果てがあるのをわたしは見ます。広大なのはあなたの戒めです。」とありました。ここで言う「戒め」もまた、神さまが命じられたこと、つまりは「神さまの御言葉」のことです。何事にも終りと果てがあるけれども、神さまの戒め、神さまの御言葉は広大で、終わりが無い、果てが無い、と言っているのです。

つまり、イエスさまは、ご自分の御言葉は、この永遠に揺るがない、神の言葉だ、と仰ったのです。滅びない、終わらない、命を与える、永遠の神の言葉なのです。

神の言葉。それは、天地を創造する御言葉。何もない無から、新しいものを造り出す御言葉です。混沌の中に、「光あれ」と言われたら、光を生み出し、存在させしめる御言葉です。そのようにして、神さまの御心を必ず実現する、力ある御言葉です。

イエスさまは、わたしの言葉が、その神の言葉だ、と仰るのです。

そして、このイエスさまの言葉。神さまの御心を実現する、神の言葉とは、まさにイエスさまご自身に他ならないのです。

神さまがイエスさまという御言葉によって語って下さったことは、わたしたちを愛しているということ。そして、憐れみ、罪を赦し、永遠の命と復活を与え、わたしたちを愛する子どもとして受け入れよう、迎え入れよう、という御心です。

わたしたちの罪を赦す御言葉。わたしたちに命を与える御言葉。わたしたちを、死者の中から起き上らせる御言葉。それが、イエスさまの言葉であり、イエスさまご自身なのです。

ですから、すべてが滅びるとしても、過ぎ去るとしても、わたしたちが、このイエスさまの、神の言葉を聞き続けるなら。神の御子イエスさまを見つめ続けるなら。わたしたちも、この御言葉によって、生きることが出来るのです。永遠である御言葉に、繋がる事が出来るのです。滅びるべきわたしたちは、この御言葉によるならば、新しくされ、永遠の命を与えられ、救いの完成に与ることが出来るのです。

「わたしの言葉は決して滅びない。」

ですからわたしたちは、滅びるもの、破壊するもの、永遠ではないものに心を捕らわれてはなりません。捕らわれなくて良いのです。決して滅びない、永遠に確立しているイエスさまの御言葉にこそ耳を傾け、イエスさまをこそ見つめ、イエスさまにのみ依り頼みなさい。そう言われているのです。

<わたしたちの滅びを担われた方>

そのことを、これからの御自分の歩みで、イエスさまははっきりと示されます。

わたしたちの、滅びからの救いは、新しい命は、この次の章から語られるイエスさまの出来事によって、はっきりと示されていきます。21章が終わったら、22章からはいよいよユダの裏切り、最後の晩餐、裁判、十字架と、一気にイエスさまの受難と死の物語が進んでいきます。

そこでイエスさまは、確かにわたしたちの死を、通られたのです。わたしたちの滅びを、わたしたちに先立って進んで行かれたのです。わたしたちの死は、先にもうイエスさまが死なれた死です。ですから、わたしたちは、自分の死を思う時には、先にイエスさまが、その死を既に通っておられることを、見つめないわけにはいきません。

そして、わたしたちは、この十字架のイエスさまに眼差しを注ぎ続けるならば、イエスさまがわたしたちの罪を担って、わたしたちの死を死なれ、そして神さまがそのイエスさまを、死者の中から復活させられたことを見つめさせられるのです。

それは、わたしたちもまた、やがてイエスさまの御跡を通して、この世の死から、終わりの日に復活へ至ることの、確かな約束なのです。

終わりの日とは、これらの神さまの御言葉が、神さまの御心が、すべて実現する日です。

それはつまり、わたしたちが、復活と永遠の命を与えられ、神さまを愛する者として、神の子として、神さまのものとして、迎え入れられる日。救いの完成の日なのです。この世のすべてが過ぎ去り、新しい天と地が現れる日なのです。

そして、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」これは終わりの日を指し示す黙示録の御言葉ですが、まさにこのことが永遠に確立する日なのです。

<いつも目を覚まして祈っていなさい>

ですから、イエスさまは 36 節にあるように、「いつも目を覚まして祈りなさい。」とされます。目を覚ましていなさい。眠らないで、目を閉じないで、イエスさまを見つめ続けていなさい。神の御言葉を聞き続け、命に留まるために、祈り続けていなさい。そう言われるのです。

そうでなければ、わたしたちは、すぐにダメになってしまうのです。世の崩壊や、争いや、苦しみにすぐに心を奪われる。目を覆われる。そうすると、わたしたちは惑わされ、慌てふためき、神さまの御言葉にのみ依り頼むべきであることを、神の御言葉に頼れば良いということ、簡単に見失ってしまうのです。そして、世の力ない、儂いものに頼ろうとします。

34 節には具体的に、「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。」とありました。「心が鈍くなる」。それは、神さまの御言葉に対して、鈍くなる。神さまに頼る心が鈍くなってしまい、他のものに頼ったり、惑わされたり、心を持っていかれてしまう、ということです。

「放縦や深酒や生活の煩い」とあります。とても具体的なことです。

「放縦」は、「二日酔い」と訳している聖書もあります。「二日酔いや深酒」。つまり、恐ろしいことなり、不安なことなり、自分の立っているところが心許なく思われる時。あるいは、色々なことで疲れ切ってしまう時に、わたしたちは、神さま以外のものに平安を求めたり、頼ったりしてしまう、ということです。

この世の一時的なことで心を軽くしようとする。この世のものに心の逃げ場を作る。

それは、二日酔いや深酒に限らず、それぞれが弱さのゆえに頼ってしまうもの、捕らえられてしまうものがあると思います。

また、「生活の煩い」。不安や心配、思い煩いで心が一杯になって、心が重くなる。目を塞がれてしまう。神さまを見上げる心が鈍ってしまう。神さまのことを考えている余裕なんてない、となってしまう。本当はそのような時にこそ、神さまの事を考えなければならないのです。ですから、そうならないように、注意しなさい。そうイエスさまは言われます。

<その日は、ふいに、すべてに>

だからいつも、神の言葉に頼るように。いつも、神さまを見つめるように。いつも、神さまの恵みを求めて、そこにこそ平安と希望を見いだすようにしなければなりません。

なぜなら、「さもないと、その日が不意に罌のようにあなたがたを襲うことになる」からです。「その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。」

「その日」とは、人の子、つまり十字架に架かり、復活し、天に上げられたイエスさまが再び来られる終わりの日のことです。

この日がいつ来るか分からない、というのは、イエスさまが繰り返し仰っていたことです。戦争によってではない。災害や疫病によってではない。人の破壊行為によって、またこの被造物の世界の力によって、終わりが来るのではない。神さまが、その日をお定めになり、神さまが終わりの日を来たらせられます。

そしてこの日は、突然に到来するものであり、その瞬間にすべての人が認識し、明らかにされる形で来る、と語られています。「その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。」いつかは分からない。しかし、この日はいつか、突然、必ず来る。それは確かなことなのです。

ですから、もしわたしたちが、終わりの日を救いの完成の日として。イエスさまと会い見え、復活を与えられ、神さまの御前に喜び躍る日として、いつも待ちわびているならば。心から期待し、希望を抱き、楽しみにしているならば。

その日が来た暁には、それは「不意に罌に襲われた」というようなものではなくて、心から待ち焦がれ、会うことを望み、楽しみにしていたお方に、やっとお会いできる日に他なりません。ある先生はそのことを、「待ちに待った恋人と出会うような喜びで、わたしたちは人の子を迎えるのだ」と表現したほどです。

しかし、もし御言葉から離れ、この喜びの日への期待が薄れ、この世のことに心を奪われ、心を鈍くして、イエスさまを忘れるような日々を過ごしていたならば。

このイエスさまが来られた時には、何が起こったか分からないような状態になってしまう。驚き、慌て、お迎えする何の準備も出来ていない、まさに罌に襲われたような状態で、イエスさまの御前に立つことになるのです。

<いちじくの木>

だから、「あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」とされているのです。

終わりの日は必ず来る。イエスさまは必ず来て、この世を終わらせ、古いものは過ぎ去らせ、救いを完成し、すべてを新しくして下さる。そう神の言葉によって、語られているのです。わたしたちは今もう、そのことを知らされているのです。聞かされているのです。

それは、まさに今日読まれた冒頭の、「いちじくの木」が教えていることです。30節「葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」

わたしたちも、梅が咲いたら冬が終わるな、とか。桜の蕾が膨らんだら、もうすぐ春だな、ということを知ることが出来ます。まだ日本の季節の移ろいはゆっくりな方で、イエスさまが生活しておられたパレスチナでは、夏は、その兆しを感じたら、準備が間に合わないくらいに一瞬で暑い日がやってくる。まさに、不意に襲ってくるように夏になるようです。

だから、いちじくの葉が出始めたら、もういつ夏が来てもおかしくないと思うこと。夏の準備を今すぐ始めなければならないこと。それを悟りなさい、ということなのです。

つまり、今わたしたちもまた、もうイエスさまが十字架によって罪の贖いを成し遂げ、復活によってわたしたちに永遠の命への道を切り拓き、天に昇り、いつ再び来られてもおかし

くない時代を生きている、ということ、悟らなければなりません。

いちじくの木の子葉は、もう出ているのです。夏はすぐそこに来ている。

「これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」わたしたちはもう、天に上げられたイエスさまが、再び来られるのを待つ時にいます。ですから、まさに今この時から、わたしたちは、イエスさまを喜んでお迎えする心備えをすべきなのです。

<滅びない御言葉に立つ>

ですから、世の破壊に、滅びに、危機に、迫害に目を向けて、もうだめだ、終わりだ、滅びてしまう、と目を閉じたり、俯いたりしてはならないのです。自暴自棄になってはいけません。諦めて、自分で滅びを招こうとしてはならないのです。

破局や暴力や死が、世を終わらせるものではありません。確かにこの世では、わたしたちの罪のゆえに、また永遠ではないゆえに、わたしたちは苦しみ、悲しみ、破れかぶれな歩みしか出来ないものです。

しかし、神さまが、その御心をこの地に必ず実現して下さいます。イエスさまが、このわたしたちを悲惨さから救い出し、そして、完成へと導いて下さいます。十字架と復活の御業は既に成し遂げられました。そして、完成の時を待っている。そのことを心から信じ、希望をもって、期待をして、イエスさまをいつでもお迎えする準備をしたいのです。

だから、わたしたちは、神の言葉に、イエスさまの御許に、留まらなければならないのです。そこにしか、依り頼むところはないのです。この世の荒波の中でも、嵐の中でも、揺らぐことのない、永遠に固く立つ、神の言葉に、永遠の命の御言葉に留まるために、いつも目を覚まして、祈り続けるのです。

そしてわたしたちは、御言葉に支えられて、はじめて、この世の苦しみも、悲惨さも、崩壊も、混乱も、慌てたり、惑わされたりすることなく向き合うことが出来るのです。そして、必要があれば耐え忍び、またこの世に対して、隣人に対して、神さまが望まれていることを行なう力が、与えられていくのです。

わたしたちは、一人でも多くの者が、この世の苦しみや悲惨の中にある人々が、共に神さまの御言葉に寄り頼み、共に確かな救いに立つことが出来るように。終わりの日を、喜びの日として、共に祈りつつ待つことが出来るように。人が滅びを自ら招くような罪から遠ざかり、神さまによる救いの完成を、神さまを礼拝しつつ、賛美しつつ、共に待ちわびるような歩みが、一人でも多くの方と共に出来るように、祈り求めたいのです。

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

わたしたちは、今日もここで、滅びることのない、永遠の御言葉を、命の御言葉をいただいています。この御言葉に生かされる者は、滅びることがありません。

このイエスさまの御言葉、神の御言葉に立ち、いつも目を覚まして、祈りましょう。

【お祈り】

天の父なる神さま、わたしたちの罪の悲惨さ、またそのための苦しみ、悲しみを、見つめさせられる日々を歩んでいます。どうか、お赦し下さい。どうか、憐れんで下さい。そしてあなたの救いの御心を、この地に実現して下さい。

イエスさま、どうか来て下さい。あなたの救いの完成の日を、あなたに新しくされる日を、心から待ち望みます。十字架と復活によって救われた者として、今日もこの礼拝に招かれ、御前に立つことがゆるされていますように、終わりの日には、ますます近く、親しく、あなたの御前に立たせて下さい。

聖霊なる神さま、わたしたちを、恐れや、不安や、動揺から解放し、心の重荷を取り除き、ただ神さまの御言葉に心を寄せる者として下さい。わたしたちが、いつも目を覚まし、祈り続けることが出来ますように。終わりの日の希望を失うことなく、十分な備えをもって、主の再び来たり給う日を、待つことが出来るように、導いて下さい。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン